

2010年（平成22年）4月24日 長崎新聞 声（投書）

諫干宮農者の声を聞かせて

農業 岩永睦喜(46)

本紙4月11日付「対論諫干排水門開門の是非」を興味深く拝見した。松永秀則氏の「漁業と農業が共存できる環境」を望む気持ちや方法までが十分伝わる。

片や、潰本磨穀穂県農林部長、相も変わらず「諫干原因説否定」が前面。熊本新港や筑後大堰（おおぜき）を原因だとすればなおのこと潔く開門調査で明らかにすればよいこと。

その他の部分でもすでに「有明海漁民・市民ネットワーク」にことごとく論破されている。

県は「公式ウェブサイト」で職員向けに掲載していた講演録で、短期開門調査の実施年を勘違いした上での塩害論を強調した副知事発言の部分を指摘を受け削除したとか。

諫干問題で、不思議に思うのは「反一万5千円、借用期間90年」の破格の待遇を受け人々の声がまったくといっていいほど聞こえてこないことだ。

漁業者の主張は「農漁業の共存」だが、彼らはそのことをどう思っているのか全然分からない。

彼らより、はるかに厳しい環境に置かれながら黙々と自分の土地で頑張っている小規模農家や、中山間地農家はごまんという。役所や業界に乗せられ「開門するな」の一点張りはやめ、自らの言い分と善後策を述べるべきではないのだろうか。 （東彼東彼杵町）